

村上博輔日記抄 一

自明治三十六年三月三〇日
至明治三十七年三月三一日

(主トシテ学院普通科関係記事・原文仮名ハ片仮名及平仮名年ニヨリ異ナル・今悉ク片仮名ヲ用フ)⁽¹⁾

明治三十六年

三月三十日 神戸ニ発信旅費ヲ請求ス。(中略) 今日書籍ノ荷造ヲ始ム。雨天 今日郵便局ニテ十円受取。

四月四日 晴天 朝郵便局ニテ金受取。長谷ヘ基一¹氏ヨリ来翰。堀、田中、山田、関等ニ暇乞ス。十二時発汽車ニテ家族一同神戸ニ赴ク。夜十二時三宮駅ニツキ太田氏⁽²⁾方ニ止宿。

四月五日 雨天 (前略) 午後原田村アタリニ家ヲ尋ネ葺合町ニテ之ヲ借ル。吉岡ヘ美国³松本ヘ益吉⁴ヲ訪フ。

四月六日 曇天 今日転宅ス。松本氏外二三名訪来。

四月七日 (前略) 帰路芦田ヘ慶治⁵及竹内ヘ榮喜⁶ニ出逢ヘリ。午後布引温泉ニ浴シ、後吉岡松本ヲ訪フ。今日

軍艦港頭ニ集合ス。

四月九日 雨天 朝太田氏来リ真鍋ヘ由郎⁷氏ヲ訪フ。三谷小崎氏等ニ面会。

四月十日 晴天 観艦式⁽³⁾朝学校ニ到リ午後家ヨリ見ル。非常ナル賑ヒナリキ。

四月十一日 雨天 朝関西学院始業式ニ到ル。竹内榮喜及ビ鶴崎庚午郎氏小話アリ。芦田慶治氏宅ニテ中飯。

四月十三日 晴天 夜関西学院ニテ笹森ヘ卯一郎⁽⁴⁾氏ノウォートルロー談アリシガ未ダ始ラザル内ヨリ帰ル。

四月十四日 晴天 朝関西学院ニ至ル。今日未ダ授業ナシ。朝笹森氏ノ談話アリ。賢コサウニ詰ラヌコトヲ云フハ米国学士ノ常カ。

四月十九日 晴天 朝タウソン〈W.E. Townson〉氏ト共ニ御影ニ往キ説教。(中略)夜関西学院ニテ説教(後略)。

四月二十日 曇天 朝真鍋氏ヲ訪フ後チ帰宅。新屋⁽⁵⁾ノ論文トシテ奇蹟的信仰ヲ書ス。

四月二十五日 午前雨 午後一時ヨリ関西学院ニテヘードン〈T.H. Haden〉氏ノ送別ニカネテ余及柴田〈勝衛⁽⁶⁾〉氏並ニ新入生ノ為ニ歓迎会ヲ開ク。其後モーズレー〈C.B. Moseley〉氏及ウォータス〈B.W. Waters〉氏ヲ訪フ(下略)。

四月二十六日 雨天 朝関西学院日曜学校ニ至リ礼拝ヲ終リテ帰ル(下略)。

五月六日 晴天 (前略) 午後吉岡夫人来訪(庭マデ)。夕刻太田氏来訪。

五月七日 曇天 午前講堂ニテ心ノ潔メト云フコトヲ談ス。午後松本氏ト共ニ布引温泉ニ行ク。

五月十日 晴天 朝御影教会ニ行キテ説教ス。題(父ノ家ニハ住居多シ)其ヨリ諸家ヲ訪問シ、三時帰宅。夜関西学院ニテ説教同題。

五月十三日 雨天夜大風ス 学校ニテ今日ヨリ三日間奥村へ福次郎氏無線伝信ノ談ヲナス。

五月二十二日 晴天 運動会前日四年級休業(下略)。

五月二十三日 晴天 関西学院ニテ運動会⁽⁸⁾アリ。小児ヲツレテ赴ク。裝飾楽隊一切生徒ノ手製ニテ面白シ。夜ハ親睦会アリ。生徒ノ俄演劇數番アリキ。

五月二十六日 晴天 関西学院ヨリ三十五円受取ル。布引温泉ニ往リ渡部氏ニ三円払フ。

五月三十日 雨天 午後五時ヨリ長谷氏宅ニ赴キ教員一同会食。長谷氏ノ謡等ヲ聞ク(植物、岩千鳥、ゼンマイ、幽霊草、ベニヨン、ツメギリ草等ヲ見ル)。

六月五日 晴天 学校ニテ年号ノ話ヲナス。

六月十三日 晴天 昨日ヨリ芦田卑劣ナル態度ヲ示ス。此男平素人々ヲ傷付クル奴ナレバ将来ノタメ懲ラシヤラント思ヒシガ、余リ過激ノコトナレバ松本ノ意見ヲ聞キテ今回ハ見合ハス(下略)。

六月十四日 晴天 朝御影ニ至ル。タウソン氏モ来ラル。教題(沖へ出で網を下して漁れ)。午後丸井島原⁽⁹⁾ニ氏来談。夜上石屋村ニ至リ説教(何故キリストを信ぜざるべからざるか)。帰リテ寝ヌ。十時ナリ。砂本⁽¹⁰⁾へ貞吉氏へ発信。

関西学院東ノ森ニガマズミ咲キ居タリ。

六月二十日 晴天 午後試験問題ヲ作ル。夜エポルス同盟会⁽¹¹⁾ニ往キ帰ル(例会ナリ)。二十七日夜親睦会ノ件議決

(下略)。

六月二十三日 晴 今日一年ノ試験ヲ終ル。午後松本氏ト共ニ太田兄ヲ訪ヒ諏訪山ノ温泉ニ遊ブ。

六月二十四日 晴 二年生ノ試験ヲ終ル。午後採点(下略)。

六月二十六日 微雨 四年生ノ試験ヲ終ル(下略)。

六月二十七日 晴天 三年生国漢文及二年生ノ歴史試験ヲ終ル。午後関西学院生徒離別式。夜エポース同盟会親睦会。パルモア学院ニテ催サル。今日ヨリ夏休暇ニ入ル(下略)。

六月二十九日 晴天 採点調べトシテ午前出校。(中略) 十時帰宅。(中略) 午後マタ登校。生徒ノ成績ニツキ評議アリ。後タウソン氏宅ニテアイスクリームヲ食フ。夜長谷氏宅ニテ謡ヲ習フ。

六月三十日 晴天 (前略) 午飯吉岡氏ノ宅ニテ教師一同会食後雑談遊戲ナドシツ、暮ニ到ル(下略)。

七月二日 天晴 但シ未ダ定マラザル氣候ナレバ摩耶旧道ヨリ関西学院ノ東ニ回リテ採集ヲナス。春日野ノ手前ニテ衣被リダケヲ見タリ。其他ニ花ナシ。午後元町ニ至リ古本ヲ搜ス。別ニ珍シキモノナシ。夜講義所ニテ説教。稲垣氏既ニ去リテ古川氏アリ。後長谷ニ至リ謡ノ稽古。

七月五日 終日微雨 (前略) 夜神戸教会ニ至ル。真鍋

氏説教既ニ始リ居タリ。題意ハ生長セント思ハズ只恩恵ヲ蒙ラントツトメヨト云フニアリキ。後稲垣氏ノ送別祈祷会アリキ。山内姉及ターナーへ W.P. Turner 氏ト逢フ。

七月八日 雨 朝真鍋氏ヲ訪ヒ共ニ関西学院ニ到リ植物標本ヲ見ル。十二時帰宅(下略)。

七月十日 曇天(註 大阪ニ於ケル第五回内国勸業博覧会ノ際伝道館ニ於テ共同伝道アリタル時ノ事) 朝芦田氏ト共ニ博覧会ニ至リ体育館、台湾館、冷蔵庫等ヲ見ル。其後説教スルコト五度。夜十二時就寝(下略)。

七月十一日 朝髪ヲ削ル。神戸ニ端書ヲ出ス。稲垣氏至ル。宇野氏ヨリ書面ヲ受取ル。真鍋氏今日ヨリ説教ス(下略)。

七月十五日 雨 連日ノ疲労ニテ終日休憩。午前ハ標本ヲ少シ整理シ、午後睡眠。後布引ヲ巡見ス。芦田松本両氏来訪(下略)。

七月十七日 晴天 七時半真鍋氏ト共ニ麻耶山ヨリ布引上流ニ採集ヲナシ帰ル。道ナクシテ澗流ヲ伝フニ或ハ躓キ或ハ仆レ或ハ茅草頭ヲ埋ムルノ岸地ヲ行クニ踏外シテ谷中ニ陥ルナド苦心慘憺タリキ(下略)。

七月二十一日 雨 午後芦田奥村両氏ヲ訪フ。道ニテ南

京豆ノ花ヲ見ル。朝小兒家内等タウンソン氏或ハ松本氏ノ宅ニ至ル（下略）。

七月二十五日 雨 朝晴レヲ伺ヒ麻耶山ニ上リイハタバコヲ採ル。帰路雨降ル。午後松本氏ヲ訪ヒ、長谷氏ヨリ金受取ル。真鍋氏ヲ訪ヒ晚餐ヲ食ス。

七月二十六日 晴 （前略）午後中村士徳氏来リ日暮マデ談話（下略）。

八月十七日 晴 朝奥村氏ヲ訪ヒ共ニ芦田ニ至ル此ニ真鍋氏モ来リ四時過マデ談話。夜謡会、安達原スム。

八月十八日 晴 （前略）真鍋氏ト共ニ摩耶山ニ至リサハギキョウ其他採集（下略）。

八月二十二日 晴 朝関西学院ニ行キ奥村氏送別会⁽¹²⁾ノコトニツキ聞合ハス。延枝今日タウンソン氏ノ宅ニ招カル。夜松本氏宅ニテ送別会九時マデ雑談。

八月二十四日 （前略）後、山崎氏来訪。奥村氏モ来ラル。夜関西学院ニテ奥村氏ノ送別会アリ。長谷氏ヨリ三十五円受取。

八月二十五日 晴 醋葉ノ整理ヲナス。朝妻長谷古川ニ夫人ト共ニ奥村氏ヲ訪フ（下略）。

九月三日 晴 脳疾全ク治マラズ十時過学院ニ向ヒ吉岡氏ニ面会。（中略）奥村氏ヨリ書面来ル。

九月七日 晴 朝ウエンライト〈S.H. Wainright〉氏

ヲミツシヨンハウスニ訪フ。キャラハン、マシユウス〈W.K. Matthews〉氏モ居ラレタリ。吉岡氏来リテ帰ル。午後タウンソン真鍋氏ヲ訪フ（後略）。

九月八日 晴 （前略）午後新星原稿トシテ秋初漫語ヲ書ス（後略）。

九月十日 晴 関西学院今日始業式ヲ行フ。三人ノ入学試験ヲ行フ何レモ不出来（後略）。

九月十五日 晴 朝関西学院ニ至リ平日ノ如ク教授ス。西川ヘ玉之助ノ氏ト会ス。正午急雨アリ。午後ハ兎角雨ナリ。長谷尾崎両氏来ラル。

九月十六日 晴 （前略）午後真鍋氏ヲ訪ヒ、北海道ヨリ来リタル標本ヲ見ル。エンレイソー、キクブキ、イワヤナギ、キツリフネ、コンロンソー、ニリンソー其他名ヲ知ラザルモノ多シ。

九月十八日 晴 今日授業中福島中教諭森某ト云フ人來觀セリ（後略）。

九月十九日 晴 正午タウンソン氏ヲ訪フ。太田氏ノタメニ二円出スベキヲ約ス。午後中村士徳氏来訪。夜ウエンライト及西川氏ノ歓迎会アリシガ往カズ。今夜暴風雨アリ。

九月二十三日 雨 暴風雨ニテ関西学院ヘ往ク。途中全

ク濡レタリ。午後二至リテ晴ル。今日札拜ヲ二階ニテ行フ。
講堂へ往カレザルタメナリ。(中略) マイヤス(J.T. Meyers)氏来訪。

九月二十六日 晴 長谷氏ヨリ金包ヲ真鍋氏ニ託シ送ラル。五円不足ナリシカバ更ニ長谷氏ヨリ受取ル(後略)。

十月三日 晴 午後タウソン氏ノ送別川島へ梅吉氏ノ歓迎会アリ。夜松本氏ト共二元町マデ散歩ス。

十月六日 晴 今日ヨリ臨時追試験ヲ行フ(後略)。

十月七日 晴 午後ウエンライト氏ヲ訪フ。給料ノ相談アリ。外国人ノ我等ニ対スル心事(金ハ外トシテ)実ニ悪ムベキモノアリ。直ニ辞センカト思ヒシガ、ナホ少事考ヘテ双方ノ便ナルヤウセント思ヒ帰ル。

十月十三日 半晴 夜ウエンライト氏宅ニ招カレ教師一同懇談。討論会ノ題トシテ漢字廃止論ヲ用ウルコト、ナシ討論数回。

十月十七日 晴 朝三戸氏来訪。次デ西川堀へ峯橋氏ヲ訪ヌ。又福音館ニ回りテ帰ル。午後川崎夫人来訪。余ハ関西学院ニ行ク。松本氏等不在ナリキ。川島氏ノ宿舍ニテ談話シテ帰ル。

十月二十三日 曇 午後ウエンライト氏ヲ訪フテ原人論⁽¹³⁾ノ翻訳ヲ手伝フ(後略)。

十月二十四日 晴 二年ノ講習ヲ行フ(後略)。

十月三十日 晴 午後ウエンライト氏宅ニテ婦人ノ集アリテ細君行ク。夜宮田、白石氏⁽¹⁴⁾来訪。(中略) 朝講堂ニテ歴史上ノ吉野ニツキ講演。

十月三十一日 晴 午後新月会大会ニ連リ生徒演説ヲ批評ス。江見、論文朗読。後先ヅ善ヲ採ルベキカ或ハ悪ヲ捨ツベキカト云フ題ニテ討論。採善主義、白木、菱川二名。去悪主義、中井、宇津木⁽¹⁵⁾二名。相当ノ出来ナリシ。

十一月三日 晴 朝学校ニテ札拜式ヲ行フ。其後ニテ陛下御生誕当時ノ社会ニツキ語ル。午後松本真鍋川島ノ三氏ト共ニ奥平野ヨリ湊川ニ出デ楠公社ニ詣デ元町ヲ経テ帰ル。市街可ナリニ賑ハヘリ。又演習ノタメ来リタル四十連隊ノ兵士往復スルモノ多シ(後略)。

十一月五日 曇 午後野球選手(京都高等学校⁽¹⁶⁾)ノ慰労会アリシガ往カズ。ウエンライト氏宅ニテ原人論ノ訳稿ヲ閱ス(後略)。

十一月六日 晴 一年生文法ノ講習ヲナス。

十一月七日 雨 (前略) 午後二年内田へ吉五郎⁽¹⁷⁾氏来宅、和歌ノ添削ヲ乞ハル。

十一月十一日 曇 痔甚シ。午前時間ヲ取誤リテ帰ル。為ニ午後三年休ミトナレリ(後略)。

十一月十二日 晴 痔幾分力輕快。午後三時、天皇陛下ノ御通輦ヲミルメヘ敏馬ノ停車場ノ東ニ奉迎ス。今日ヨリ大和ヘ旅行ノ筈ナリシガ止ム。

十一月十三日 晴 朝休暇ノ時間尾崎氏ト書籍館ニテ談話(後略)。

十一月十五日 曇 (前略) 朝大阪ニ至ル。(中略) 午飯ヲマイヤス氏宅ニテ食ス。ウエンライト氏モ居タリ。今日午後青年会演説アリシ。多来ラレシナリ(後略)。

十一月十八日 曇時々雨 陛下今朝八時還幸前ノ所ニ奉送ス。夕景中村氏⁽¹⁸⁾東京ニ往クトテ暇乞ニ来ラル。

十一月二十五日 晴 俸給ヲ受ク。耶山堂ヘ三・二五〇^(ママ)払フ。午後四時ヨリ寄宿舎文学会ニ至リ批評ス。夜頭痛、早ク寝ヌ。

十一月二十七日 雨 夜芦田氏ノ晚餐ニ招カレ十時帰ル。真鍋川島モ招カレタリ。大石良雄、後藤機等ノ書画ヲ見ル。

十二月一日 雨 記事ナシ。二年生ニ時雨ノ感ノ即題ヲ課ス。

十二月二日 晴 (前略) 三年ニ歳暮ヲ迎フル感ノ即題ヲ課ス。

十二月三日 晴 日暮山田松本⁽¹⁹⁾ノ二生来リ養老会ノ歌ヲ作ルコトヲ依頼シ予承諾ス(後略)。

十二月五日 曇 夜雨後晴ル 神戸教会ニテ関西学院生徒文学会英語講演会アリテ往ク。何レモ上出来ナリ。其主ナルモノハ、

Oration (A Talk about Spiritual Food), Debate (Resolved 'That the Use of the Chinese characters should be discontinued in Japan'), Dialogue (Worth before Show).

十二月八日 晴 夜曇 二年ノ文法講習ヲナス(後略)。

十二月十一日 晴 二年ノ講習採点ヲナス。

十二月十二日 曇 夜関西学院生徒ノ討論会(日露開戦ノ理否)アリ。招カレシカド行カズ。

十二月十五日 晴 今日頭悪ク例ノ放心ニテ十一時半帰宅。生徒ノ科休業。午後休臥ス。

十二月十六日 時雨 今日二年級ノ教授ヲ終ル。三年級文法講習。午後在宅答紙調査(後略)。

十二月十七日 晴 三年四年一年ノ授業ヲ終ル。午後試験問題ヲ作ル。昨日以来冷氣甚シ。

十二月十八日 晴 今日ヨリ二学期試験始マル。一年ノ試験ヲ行フ。帰後採点、夜ニ入ル。

十二月十九日 晴 二年ノ国語漢文試験ヲ行フ。夜神戸美以教会⁽²⁰⁾ニテエポース同盟会學術演説会アリテ聖書編纂ノ歴史ヲ講ズ(後略)。

十二月二十二日 晴 三年ノ国漢文、二年ノ歴史ヲ試験ス。

十二月二十三日 晴 四年ノ試験ヲ行フ。川瀬及耶山堂⁽²¹⁾ニ金ヲ払フ。夜関西学院クリスマス学生的集会例ノ如シ盛会。芦田ヨリ饅頭、窪田氏ヨリ手拭、石鹼其他小児等へ贈物ヲモラフ。福引ニテ予コンニヤク、へ村上⁽²²⁾謙介麩、そのえ⁽²²⁾、細君火かきヲ取ル。田舎ニテハ近來クリスマスニ贈物ヲ行ハズ。始テ之ヲ廃セシトキハ甚ダ淋シク感じタリシガ止テ見レバ又有ルノガ俗メテ面白クナシ。

十二月二十四日 晴 午後二時ヨリ教師会ニテ学院ニ至ル。終リテ俸給ヲ受取り頼母子アリ。真鍋氏ニ落ツ（後略）。

十二月二十五日 晴 朝真鍋氏ヨリ十円借ル（後略）。

十二月二十八日 晴 朝松本氏吉岡氏ヲ訪ヒ試験問題ヲ渡ス（後略）。

十二月二十九日 雨 終日在宅。夜松本氏訪来小児ニクリスマスノ贈物ヲ与ヘラル。後共ニ長谷氏ヲ訪ヒ談話数刻。雨晴レテ月皎々。

明治三十七年

一月七日 木 晴 関西学院始業式アリ。後臨時教師会

ヲ開キ△△△⁽²³⁾ガ第二学期試験英文法科ニ於テ不正ノ手段ヲ以テ答案ヲ作りタル処分ヲ議シ教師列席ノ前ニテ譴責シ答案ヲ無効零点トシ講堂ニテ罪状ヲ告白セシムルニ決ス（後略）。

一月八日 金 晴 関西学院ニ至リ始テ三学期ノ業ヲ授ク。三年漢文蘇老泉ノ高祖論（未終）、四年祭田横人、はれぬ雲（未完）、修辭 名辭ノ修飾、一年文法、単文解剖。午後明治書院ヨリ訂正中等国語読本一部寄贈ヲ受ク。（中略）午後ヨリ文法教案ヲ編纂ス。（中略）午後久藤氏来リ学資ノコトニツキ相談セラル。

一月九日 土 曇 午後雨降ル 二年授業ヲ始ム。耶馬溪図巻記始マリナリ。課業後田中生歴史答案ニツキ質問ス。午後松本氏ヲ訪フ。自転車ニ空気詰込ムトテ混雑中ナリキ（後略）。

一月十二日 火 晴 朝屋裏ノ藪中鴨ノ鳴クモノアリ面白シ。二年生濠州航路ヲ終リ三年生頼朝論ニカ、ル。二年耶馬図巻ニ未終、四年出師表ニカ、ル。午後二年ニ指定、決定指示ノ「テニヲハ」ヲ授ク。（中略）今日一年仲川和田⁽²⁴⁾兩人ノタメ追試験アリ。問題調整ノタメ講堂ニ出デズ。余今朝ヨリ眼痛ヲ感ズ。

一月十三日 水 雨 朝講堂ニテ長谷氏注意ノ完全ナル

ベキ様ヲ勸メ同氏が想像ヲ以テ猫ノ顔ヲ画カントシテ成ラザリシ。経験談、食道楽ノ大腹某ガ御馳走ヲ無暗ニ食フノ談ヲ述ベラル。面白シ。一年相模洋、三年文法名詞ノ修飾、四年新島守ニカ、ル、二年甲冑堂終マデ。午後東洋史武帝ヲ終ル。ウエンライト氏三年生ノ馬琴及万葉ヲ知ラザル由謂ハル。学生ニテ此等ヲ知ルハ容易ナラジ。西人ノ此種ノ批評ニハ困却ス。同窓会ヲ催ス回章アリ。西川氏二月ノ故事ヲ写シ送ルベキヲ約ス（後略）。

一月十四日 木 曇 講堂ニテウエンライト氏ノ食物談アリ。教授一年船室ノ記、三年宇治川ノ先陣（未終）、四年（同前）、二年歴山王ノ逸事（一）。（中略）午後久留島（武彦）氏ノ佐世保近況ニ関スル演アリト聞キシガ聴カズシテ帰宅ス（後略）。

一月十五日 金 晴 教授三年（同上）、四年（同上及副詞）。小西年ヨリ山下氏ノ書面ヲ受ク。同氏信仰恢復ノ由伊予伝道ノ模様明瞭ニ記載セリ。午後一年文法名詞ノ修飾復習動詞ノ復習（熟語動詞及助動詞「き、たり」）（後略）。

一月十六日 土 曇 （前略）教授三年（同上）、（同上）一年交通機関、二年太閤雑事ニカ、ル。島原氏文学会ニ朗読スルトテ帰去来賦ノ読方ヲ問フ。（中略）五時過

ヨリ自由亭⁽²⁷⁾ニ至ル。同窓会食合計二十人余。規則ノ改正（会員ハ五十錢ツ、三月ト十月トニ納ムルトノ個条アリ）。及同窓会ヨリ書籍館ヘ寄付スルノ議成立ス。会費一円。帰路福音館ニ立寄ル。土国英国ノ抗議ニヨリ魯艦ノダーダネル海峡ヲ通過スルヲ拒ミシコト其他春日艦等スエス過航ニ関スル号外ヲ見ル。松本川島宮田同道⁽²⁸⁾。

一月十九日 火 曇 朝出校ノ途次見レバ六甲山ノ一角樹禿ゲタルトコロ雪積ミ居タリ。授業一年カムサツカノ犬及駱駝之説、三年同前、二年高野長英終ル。四年中学読本済ム。午後三年文法接続「テニヲハ」。生命保険会社ヨリ松本真鍋同封ニテ契約書ヲ送り越ス。松本氏ニ渡ス（後略）。

一月二十日 水 曇 朝時間後レタ、メニ三年文法ノ教案書ヲ忘レ札拝時間ニ取二帰ル。授業一年小笠原、二年遭厄、四年孟子ヲ始ム。午後二年歴史王莽ノ滅亡マデ（後略）。月二十一日 木 晴 授業一年レッシングノ比喻、三年同前、四年漢文読本柳宗元沽鋤潭等、二年同前。朝長谷氏ヨリ伝送金並ニ大阪西教会⁽²⁹⁾ニ送ル書面ヲ受取ル。講堂ニテ吉岡氏ノ馬可伝講義アリ。淡泊水ノ如シ。聴クモノ少シ。ウエンライト氏ノ談ニ曰ク、仏教ハ正中偏、偏中正ヲ唱ヘナガラ、ヘーゲルノ如ク偏ヲ研究シテ正ヲ求メントセ

ザルハ奇ナリト。余曰ク、是彼ハ究メテ起リ之ハ聞キテ起ルガ故ナリ。哲学ノ徒弟易カラザルナリト（後略）。

一月二十二日 金 晴 今朝盤水堅氷ヲ破ル。朝陽甚ダ麗ナリ。但シ午前十一時頃ヨリ曇リテ降雪ス。三年同前、四年孟子及文法、一年助動詞過去（後略）。

一月二十三日 土 晴 堅氷一日中融ケズ。授業三年古戦場ヲ弔フ文ニカ、ル。一年波蘭懷古、二年花売娘（中略）。夜菊池福次郎氏來訪。寄宿舎演説会ノ批評ヲ頼マレバ居タレバ、六時半ヨリ偕ニ行ク。氏ハ明日大坂ニテ再ビ訪フベシトテ帰ラレタリ。演説ハ中山（詩篇朗読）、三宅（演説）、島原（韻文朗読）、三年加藤及白石⁽³⁰⁾（演説）ナリキ。今夜ハ^(ママ)力行会ノ音楽会アリ。エポースノ例会アリテ人少シ。

一月二十六日 火 曇 雪ヲ踏ンデ校ニ上ル。講堂ニテウエンライト氏祈禱ノ話アリ。祈禱ノ応驗ハ事実ナリ、理論ニアラズト謂ハル。二年天⁽³¹⁾平波ノ授業ヲ終ル（普通教授ハ爾來記サズ）。明治書院ヨリ漢文読本及文法書到着（後略）。

一月二十七日 水 晴 今朝サイベリア号ニテニユートン⁽³²⁾（J.C. Newton）氏來ラル。吉岡外ハイカラ組迎ニ出掛ケラル。講堂ニテ長谷氏ノ司会、真鍋氏ノ談話アルベキ筈

ナリシモ無クテ止ミヌ。三年文法終ル。二年歴史班固ノ西征マデ。午後ニユートン氏ヲ訪ハントシタルガ妨アリテ止ミヌ（後略）。

一月二十八日 木 雨 朝霽降ル。二年国語読本終ル。午後二時半ヨリ川島氏ト共ニニユートン氏ヲ訪フ。ミッシヨンハウスヲ訪ヒテ不在。コート氏⁽³¹⁾ノ宅ヲ訪ネテ不逢。帰路真鍋氏ヲ訪フ。国葬ノ絵ヲ見ル。昨夜同氏ノ宅前二回祿アリ。今日マデ知ラザリキ。木造西洋館ノ焼残リタル跡凄マジカリキ。婦リテ夕食シ小鍛冶ヲ謡ヒテ寝ル（往路布引マデハ真鍋氏トモ同行）。朝講堂ノ話ハ吉岡氏ノ馬可伝例ノ如シ。

一月二十九日 金 曇 今朝氷張ラズ。朝講堂ニテニユートン氏ノ挨拶アリ。此老人矍鑠古ニ異ナラズ。四年ニ文體論ヲ教ヘ始ム。午後一年作文、加藤氏⁽³²⁾ノ文ヲ批評ス（後略）。

二月二日 火 晴 講堂談話ウエンライト氏ノ撰理談、神ハ愛ナリ、サレド惡魔ハ之ヲ疑ハシムルトテ創世紀誘惑ノ話アリ。ニユートン氏今日ヨリ出勤。二年ニ作文（歌評シテ其添削ヲ乞ヘルモノニ答フル書）ヲ始ム（後略）。

二月三日 水 雨 天陰リ時計後レ居タルタメ出校遅レタリ。講堂ニテ名ノ起源ヲ談ス。今日ハ柴田氏ノ番ニテ余

ガ話スニハアズト思ヒタリシナリ。ニュートン氏談話ヲ書キ呉レヨト請ハル。三年ニ梅花ノ題ニテ作文ヲ課ス。二年歴史明帝章帝ノ世ヲ終ル。今日植村正久氏ノ談話アル筈ナリシヲ時間ノ都合ニテ出来ズ。

二月四日 木 晴 吉岡氏馬可伝ノ話今日ヨリ英文聖書ニ拠ラル、ヨシ（後略）。

二月五日 金 晴 例ニ由テ遅ク登校。神戸新聞ヲ見レバ御前會議愈ニ開戦ニ決シ露国ニ対シ自由行動ヲ取ルコトニナレリトアリ。大能ノ神ハ我国ニ勝利ヲ与ヘ玉フコト、又此戦争ガ神国発達ノ上ニ良好ノ結果ヲ来サンコトヲ信ジ祈祷セリ。午後ニュートン氏ノ歡迎会アリ。司会大林、普通科代表小西、神学科代表白石。島原ノ英語、ウエンライト松本吉岡氏ノ懷古談アリ。ニュートン氏ハ学校ハ建物ニアラズ品性アル教師生徒ノ合一ニアリト述べ、又我国兵士ノ勝タザレバ死スト約シテ戦場ニ臨ム習慣ヲ褒メ、神国ノ兵士モ此クアルベキヲ勸メラル。

二月六日 土 晴 講堂ニテニュートン氏ノ談話アリ。如何ニシテ品性ヲ形造クルカト云フ題ニテ、人生ニ三面アリトテ其広カルベキヲ説カル。高サ深サハ次回ニ残サル（後略）。

二月九日 火 晴 講堂ニテウエンライト氏、爾曹ハ雀

ヨリモ勝利タルモノナリトノ聖語ヲ以テ人間ノ価値ハ基督ニ由テ現ハレタリト謂ハル。即チ第一 人間ノ至リ得ベキ栄光知レタルコト。第二 神ノ其子ヲ与ヘ玉フコトニ由リテ其重ヲ知ルト。人間ニ歴史アリテ猿ニ歴史ナキハ物質以外ニ勝レタル靈アリテ然ルナリト謂ハル。二年作文ハ次回ノ日マデニ浄写シテ出サシム。釘宮ヘ辰生ノ氏学校ニ来ル。午後ウエンライト氏ヲ訪ヒ高等部及ビ文科教授ノコトニツキ相談。外交始末書ヲ見ル。在韓魯公使ヲ禁錮セシコト、魯船一艘捕獲シ来リテ長崎ニ在リトノ報伝ハル。

二月十日 水 晴 我軍艦仁川港外ニ於テ露艦ワリヤーク及コレーツヲ捕獲シ、又義勇艦隊汽船エカテリースラフヲ捕獲シタリトノ報ニ接ス。其ヨリ続々ト戦勝ノ報ニ接シタリシガ、余ハ号外ヲ得ザルタメ知ラズ。講堂ニテ長谷氏ノ餅ノ成分ニツキ講話アリ（後略）。

二月十一日 木 晴 朝例ニ由テ出校。聖節ヲ賀シ天皇陛下及日本帝国ノ万歳ヲ賀ス。釘宮氏今日我人民ノ覚悟ニツキ演説アリ。我軍艦旅順港ヲ攻撃シテ露艦十一艘ヲ撃沈八艘ヲ捕獲ストノ吉報ヲ得、神ノ恩祐ヲ感謝シ、ナホ此上ニモ永遠ノ勝利我上ニ与ヘラレンコトヲ祈ル（中略）。正午改良亭ニテニュートン氏歡迎会アリシガ往ク能ズ。午後芦田氏訪問。

二月十二日 金 晴 朝布引ニ至リ毎日新聞ヲ買來ル。

魯艦全滅ニ対スル公報ハ未ダ記載ナシ。但シ七艘ノ破壊セラレタルハ確カナリ。帰路旭日殊ニ麗ハシキヲ見ル。「春うらゝ、旅順に通ふ 船見えて」ト口吟メリ。出校ス。東北学院スネーダー〈D.B. Schneider〉ト云ヘル人來リ居テ講堂ニテ談話ス。米人等我国ガ英米ノ助ケヲ借ラズシテ迅速ニ露艦ヲ多ク撃破シタルヲ悦バズ。マニラノ光榮ヲ奪フモノ、如ク思ヘリトハ僻目カ（後略）。

二月十三日 土 晴 （前略）吉岡氏講堂ニテ宣戰詔及文部大臣ノ訓令ヲ讀ミ今又所ニ大ニ力癩ヲ□ラル。午後例ノ午睡。夕刻大林氏來リ今夜寄宿舍討論会ノ批評ヲ乞ハル。六時三十分ヨリ行ク。題ハ乞食ニ金錢物品ヲ与フル可否ニテ、南寮ハ肯定北寮ハ否定。兩派トモ最初ト最終ハ各十分間ニシテ其他ハ五分間ノ演說ナリ。議論ハ相変ラズ巧ナリ。

二月十六日 火 曇 朝講堂ニテ釘宮氏司会並ニ談話、信仰ヲ意志ノモノナラザルベカラズト説キ、感情的及智識的ノ危険ヲ説ケリ。サレド要領ヲ得ズ（中略）。午後松本長谷氏等ノ教育主義ニ関シ談話セラル、ヲ聞クニ、松本ハ例ノ如ク伝聞の実業主義、長谷氏ハ常情説ナリ。教育ハ誰モ論ジ得ルトコロ、又知ルモノ少キトコロノモノ乎。

二月十七日 水 雨 （前略）講堂ニテ松本氏慾望ニツ

キ談話（後略）。

二月十八日 木 晴 旅順第三次攻撃ノ報ニ接ス。愉快々々。吉岡氏ニ磯田氏⁽³⁴⁾傭聘ノコト談シ、又磯田氏へ書面ヲ出ス。群書類聚一冊借歸ル。新撰朗詠集謄写ノタメナリ。

二月二十日 土 曇 講堂ニテニュートン氏品性論ノ続ヲ演ゼラル。平々凡々ノ説ハ此翁ノ特所ナリ。

二月二十三日 火 晴 講堂ウエンライト氏ノ談例ノ如シ。午後磯田氏ヨリ書面來ル（後略）。

二月二十四日 水 晴 講堂ニテ真鍋氏耳ノ話ヲス。磯田氏ノ書翰ヲ吉岡氏ニ渡ス（後略）。

二月二十五日 木 晴 （前略）午前吉岡氏欠席ノタメ二年生繰上教授。午後休ム（後略）。

二月二十六日 金 晴 今日講堂ニテ談話スル筈ナリシガ昨日吉岡氏ト入替リノタメ行カズ。但シ昨日モ突然ノコトニテ談ゼズ。今回ハ流レナリ（後略）。

二月二十七日 土 曇 川島氏今日広島ニ行クト言ハシシヨリ書翰金錢等托セントシタルガ、急ニ止メリト聞キ午後郵便ニテ送ル。照江咽喉⁽³⁵⁾ヲ痛ミ今朝ヨリ難ム。十二時布引病院ニ赴カシメ後ニテ一人天父ノ祐助⁽³⁶⁾ヲ祈ル。謙介ト共ニ塩鯊ヲ焼キテ昼食ス。朝講堂ニテニュートン氏ノ講

話アリ。号外ニテ旅順閉鎖ノ詳報ヲ見ル。我軍人ノ極メテ沈着ニシテ事ヲ誤ラザルハ敬服ノ至ナリ。神ヨ彼等ヲ護リ玉ヘ。速ニ戦勝ヲ得セシメ玉ヘ。今朝講堂ニテ余司会ス。今日春日、日進回航^{ヘジフテリア}當地ニ来リシ報ヲ読ム。

(註 此回、四女照江実扶の利亜ニテ死亡、葬儀。二女園枝同ジク実扶の利亜ニテ神戸病院ニ入院。照江死亡前後、二女園枝二男謙介ヲ松本氏方ニ預ケタル事、諸家ノ来訪等ノ記事アレドモ直接学院史ニ関係ナキヲ以テ省略ス)。

三月八日 火 曇 今日始テ学校ニ出ヅ。細君留守ナレバ謙介ヲ伴ヒテ行ク。午後課ヲ休ミ布引及神戸郵便局ニ至リ小為替金ヲ受取ル。雨降出シタレバ相生橋ヨリ腕車ヲ僦ヒ病院ニ至ル(後略)。

三月九日 水 曇 謙介ヲ伴ヒ学校ニ行ク。昨日ノ如シ。午後歴史科ヲ休ム。竹迫氏ヨリ其家兄ノ就任周旋方ヲ依頼シ来ル(後略)。

三月十一日 金 雨 朝雨ヲ侵シ謙介ニ園枝ノ破傘ヲサ、セテ出校ス。車夫二十錢払フ。昨日病院へ往キタル賃金ナリ。

三月十二日 土 晴 (前略) 朝ウエンライト氏学生ノ礼儀及思想缺墜シタル由ヲ談ス。

三月十四日 月 晴 朝松本吉岡氏ヲ訪ヒ、午後川崎長谷堀越真鍋氏ヲ訪ヒ返礼ス(後略)。

三月十六日 水 晴 普及社ヨリ、国語新読本ヲ受取ル。(中略) 朝講堂ニテ松本氏戦時経済ノコトニツキ談話アリ。

三月十七日 木 曇 講堂ニテ吉岡氏、退学者ノ心得ヲ談セラル。午後課業ヲ休ム(後略)。

三月十八日 金 曇 今ニモ雨降ランガ如キ有様ナリ。四年修辞ヲ休ミ、午後一年ノ文法試験ヲナス(後略)。

三月二十一日 月 晴 宇野氏ニ書面ヲ送り、又関西学院ニ行キ規則書ヲ得テ同氏ニ送ル。奥村氏ニ返信ス(後略)。

三月二十二日 火 晴 今朝軍資儲金十錢ヲ出ス。三週間目ナリ。講堂ニテウエンライト氏真実ヲ主トスル関西学院ノ方針ヲ談セラル。今日一年三年ノ業ヲ終ル。是ニテ授業終結セリ(後略)。

三月二十三日 水 曇 明日ヨリ試験始マルヲ以テ午後一人湯ニ行ク。後問題ヲ作ル。

三月二十四日 木 晴 今日本科一年ノ試験ヲ行フ。帰り来リテ採点ヲ行フ(後略)。

三月二十五日 金 雨 二年ノ試験ヲ行フ。宮田氏⁽³⁷⁾軍歌ノ添削ヲ乞フ。帰来採点前日ノ如シ。今日月俸ヲモラフ。

二十五円ノミ。頼母子ヲ取ル。二円引キ真鍋氏二十円払ヒ手取り八円ノミ。

三月二十六日 土 晴 三年ノ試験ヲ行フ。(中略) 夜宮田丸井来訪。⁽³⁸⁾大林氏軍歌ノ添削ヲ求ム。

三月二十九日 火 晴 四年級ノ試験ヲナス(後略)。

三月三十日 水 晴 朝二年歴史ノ試験ヲ行ヒ直ニ採点。午後一時ヨリ教師会議。日暮レテ帰宅。夜卒業生及柴田溝端氏送別会ニテ再ビ出校(後略)。⁽³⁹⁾

三月三十一日 木 晴 朝関西学院ニ行ク。試験成績発表アリ。落第二十四名、仮及第五、六名アリ。

注

(1) 村上謙介がこの「日記抄」を作成する際に付した注意書きである。

(2) 関西学院普通学部教員として赴任する以前の村上博輔の勤務先は、広島市広陵中学校であり、ここに登場する「堀田中、山田、関」は広島での知人であろう。また、太田は神戸美以教会員で、石井村に住む判事太田彌一郎であろう(『神戸美以教会員名簿』明治三八年)。なお、この名簿によると本日記に登場する稲垣は稲垣央、宇野は宇野真一であろう。

(3) 一八九九年外国人居留地が神戸市に編入されて後、この一九〇三(明治三六)年に最初の観艦式が挙行された(鳥居幸雄『神戸港一五〇〇年』一九八二年)。

(4) 笹森卯一郎は東奥義塾を卒業後、本多庸一から受洗し、一八八五年九月アメリカ留学。ディポー大学で学び、Ph.D.取得。九三年帰国。長崎市出島メソヂスト教会牧師のかたわら鎮西学館(鎮西学院)で教鞭をとり、一九〇四年鎮西学館副館長、六年日本人初代館長となった(『日本キリスト教歴史大事典』一九八八)。

(5) 『新星』は、「明治三十三、四年頃に至りて、当時の学生生徒等相議して、極めて自由なる言論機関として、回覧雑誌」として発刊され、「表紙画の揮毫は、定方末七郎へ同窓の画家之に当り、皆々盛んなる論議を闘わせり。後此雑誌は印刷せらるゝ事となり、菊版四頁の新聞型の小雑誌となりしかば、同窓生等はその一隅に『同窓欄』を設けて、相互連絡の資となし、会報の発行難による不便を補ふことゝとなりぬ」という(『開校四十年記念 関西学院史』四八頁)。なお、この雑誌は現在学院史編纂室には一冊も所蔵されていない。

(6) 村上博輔と同時に赴任した英語教師柴田勝衛は「旧教職員表」(『開校四十年記念 関西学院史』)によれば、明治

三三年四月から三五年九月まで普通学部で英語の教員をしていた。なお、村上の名は、この「旧教職員表」の「中学部」欄には記載されず、「文学部」欄に記載されているため、「旧教職員表」を参照したと思われる『関西学院高中部百年史』（一九八九）の「明治、大正、昭和の各時代の教職員の動向」には、その名が記載されていない。

(7) 御影教会は、一八九〇年土地の有力者吉田履一郎がJ・C・C・ニュートンを招いて開いた日本南メソヂスト教会講義所に始まる（前掲書『日本キリスト教歴史大事典』）。

(8) この神戸港沖の観艦式を祝って開催された運動会が関西学院最初の運動会である（米田満「関西学院体育スポーツ抄史―原田の森時代の先人に聞く―」『関西学院史紀要』第二号、一九九二）。この時普通学部二年生であった山田耕作は、この観艦式の祝いをかねて開催される関西学院の運動会を景気づけるために仲間とともに「楽隊」を組織し、彼のピッコロが旋律楽器となり、本館の屋上で夕暮れまで演奏した。その縁で仲間七名が「みるめ」によばれたという（山田耕作『はるかなり青春の調べ』一九五七、浏览吉『楽聖 山田耕作を囲む人びと』一九九六、前掲書『関西学院高中部百年史』）。一端途絶えたこの運動会は明治四一年一〇月一日再開された。以後、この運動会は神

戸でも有名な運動会となった（前掲書『開校四十年記念 関西学院史』六七頁）。

(9) 卒業生名簿によれば、一九〇五（明治三八）年普通学部卒業生に、丸井藤吉の名が、翌六年卒業生に、島原逸三の名が見える（『会員名簿 1998』関西学院同窓会）。

(10) 砂本貞吉（安政三年九月三〇日―一九三八年五月七日）は、南メソヂスト監督教会牧師。広島県佐伯郡已斐村生まれで、船員になる目的で渡米、サンフランシスコの福音伝道会で入信。八六年一〇月、J・W・ランバスの支援で女子塾（広島女学院）を創立。同時に流川（広島流川）教会を組織した（前掲書『日本キリスト教歴史大事典』）。

(11) 共励会と呼ばれ、メソヂスト教会の青年会であり、明治三八年当時婦人会とともに重要な組織であった（前掲書『神戸美以教会員名簿』）。

(12) 数学担当の奥村福次郎は、明治三五年と三六年の二年間のみ、関西学院普通学部で奉職していた（前掲書『関西学院高中部百年史』）。

(13) この「原人論」は、Darwin, *Origin of Man* の翻訳・緒論・注解よりなり、未刊の草稿である（『ウェンライト博士伝』一八四〇年、二四八頁）。

(14) 卒業生名簿によれば、一九〇一（明治三四）年普通学部

卒業生に、宮田守衛の名が見える（前掲書『会員名簿 1

998』。宮田は明治三十一年普通学部二学年に入学、三四年に卒業、四月には英語専修科入学、三五年一〇月退学し、松山高等小学校代用教員に赴任後、再び明治三十七年四月に高等科英文科入学、明治四〇年三月卒業した。この日記が書かれた時期は、代用教員時代だが、来神し、母校を訪ねたと考えられる（学院史編纂室所蔵「履歴書」および水谷豊「バスケットボールの歴史に関する一考察」『上越教育大学研究紀要』第四号、一九八五年）。なお、宮田守衛は本学第一二代院長宮田満雄の父にあたる。白石については、注(30)を参照のこと。

(15) 卒業生名簿によれば、一九〇五（明治三八）年普通学部卒業生に、中井佐一郎、菱川精一の名が、また翌六年卒業生に、白木正次の名が、さらに七年卒業生に、江見恒三郎の名が見える。なお、菱川精一は一九〇八年神学部本科をも卒業している（前掲書『会員名簿 1998』）。

(16) 一一月二日、関西学院の野球部は、三高大会で15対12で明倫中学校に勝利していることから、この勝利の祝賀会であったであろう（米田満前掲論文および『関西学院野球部百年』一九九九年、二〇頁）。

(17) 数学教師内田吉五郎は、明治二十四年九月に就任し、明治

三十四年三月一旦退職したものの、明治三十九年四月再就職し、大正七年三月に退職している。従って、この明治三六年には退職中であるが、「内田」はこの内田吉五郎の可能性が高い（『旧教職員表』、『開校四十年記念 関西学院史』）。

(18) この中村は中村士徳（前出、九月十九日）の可能性が高いが確証はない。

(19) この「山田松本」は「二生」と書かれているので、生徒だと考えられるが、この時期の生徒で山田姓としては唯一山田耕作が該当し、「養老会ノ歌」とあるので、山田耕作の可能性が高い。松本には該当者が見あたらない。

(20) この日記では、現在の神戸栄光教会は「神戸教会」、「神戸美以教会」と呼ばれている。

(21) 「川瀬」は神戸にあった書店と思われる。「耶山堂」は当時唯一のレクリエーションの店であった。

(22) 謙介は村上博輔の次男であり、そのえ（園枝）は村上の次女である。

(23) 個人名が書かれているものの、文脈上、空欄とする。

(24) 卒業生名簿によれば、一九〇四（明治三七）年普通学部卒業生に、和田新の名が見えるが、仲川の名は見あたらない（前掲書『会員名簿 1998』）。

(25) 卒業生名簿によれば、一九〇四（明治三七）年普通学部

卒業生に小西巽の名が見える(前掲書『会員名簿 1998』)。

- (26) 注(5)で示した島原逸三か。「島原氏」と書かれているのは、前年の「卒業生」であって、「生徒」でないためだろうか。

- (27) 神戸市東川崎町一丁目にあった自由亭と思われる。なお、この店と一八八五年五月一九日に神戸宇治川筋に開店した店との関係は不明。ただ、一八八七年一〇月八日に広告に出た自由亭支店(本店は大坂中之島)とは同じである(『神戸新聞』一九〇三年一月一五日附録、『朝日新聞』一八八五年五月一九日および一八八七年一〇月八日)。また、後出の改良亭の住所は不明である。自由亭については、大阪市史編纂所長堀田暁生氏に貴重な情報を提供していただいた。記して謝意を表わします。

- (28) 注(14)で示した宮田守衛のことか。

- (29) J・B・ヘールとA・D・ヘール兄弟が一八七八年一二月に大阪南堀江で開いた南堀江講義所が始まりで九〇年大阪西日本基督教会と称した(前掲書『日本キリスト教歴史大事典』)。

- (30) 卒業生名簿によれば、一九〇二(明治三五)年普通学部卒業生に白石和三の名が、七(明治四〇)年普通学部卒業生に、加藤俊則の名が見える。また、白石は七(明治四

〇)年に神学部を卒業している。なお、明治三六年一〇月三〇日に登場する白石はこの白石かどうかは確定はできないが、可能性は高い。ただ、明治三七年の二月五日に登場する白石はこの和三であろう(前掲書『会員名簿 1998』)。

- (31) 「旧教職員表」によれば、このW・コートは、普通学部で英語の教師を勤めていた。その任期は一九〇二(明治三五)年一月から同年九月である(『開校四十年記念 関西学院史』)。

- (32) 注(30)で示した、加藤俊則の可能性もあるが、「加藤氏」とされているので、生徒加藤俊則ではないかもしれない。
- (33) 注(25)の小西巽であろう。白石は白石和三、島原は島原逸三であろう。

- (34) この磯田は旧教職員名簿等によっても雇用された形跡は見あたらない。

- (35) 照枝は、村上の四女。

- (36) 祐助は、村上の亡き父か。

- (37) 宮田守衛注(14)のことか。

- (38) 宮田守衛注(14)と丸井藤吉注(9)のことか。

- (39) 文脈からこの「溝端」は教職員と思われるが、「旧教職員表」および「旧教職員名簿」(『関西学院七十年史』)にも、この名は見あたらない。

【資料解説】

『村上博輔日記抄』の著者村上博輔（慶応元年一〇月一五日—一九二六年四月二〇日）は、広島県佐伯郡石内村で生まれ、郷土の儒者吉村斐山、河野小石らに漢籍を学び、一八七九年五月以降英語を学ぶ。同年七月佐伯郡草津村小学校上等科を試験により全科を卒業。一時同校の助教諭となる。八二年からドイツ語などを学び、八六年広島県御用掛となり、鉾山科勤務のかたわら歴史・文学を学ぶ。八九年一月辞職。同月二二日広島美以教会でW・R・ランバスより受洗。九四年八月南メソヂスト教会伝道師となる。一九〇一年九月広島市広陵中学校教頭となり、三年三月辞職し、四月より関西学院普通学部教員に就任し、国語と漢文とを担当。九年四月普通学部教務主任。一二年四月の高等学部設置に際し、文科教員。二一年の名称変更によって高等学部文学部教授となる。二六年退職した。

この日記は、関西学院に就任直前の一九〇三年三月三〇日から書き始められ、一二年三月三一日までを第一巻とし、同年四月二日から退職直前の二六年一月一三日までを第二巻とする計二巻から成る。現在、本学院史編纂室が所蔵する抄本原本は、そのタイトルが示すように、現在その所在が不明な原本『村上

博輔日記』を息子の謙介が「主トシテ学院普通科関連記事」のみを抽出し、「原文仮名ハ片仮名及平仮名年ニヨリ異ナル」文章を「今悉ク片仮名ヲ用」いて抄本としたものである。息子謙介（一八九七年四月五日—一九四六年五月五日）は、一九一〇年関西学院普通学部に入學し、一五年高等学部文科に進学、一十九年卒業。二〇年九月京都帝国大学文学部に入學し、英文学を専攻。修了後、二三年四月に中学部教員に就任。『開校四十年記念 関西学院史』の編纂執筆に従事。四四年中学部教員より関西学院総務部に転じ、学院史編纂主任として『関西学院五十年史』の編纂に従事するが、その完成を待たずに病死した。彼には日記『甲東落葉籠』（1930—39）がある。

なお、今回印刷に付したのは『村上博輔日記抄』の内、一九〇三（明治三六）年三月三〇日から一九〇四（明治三七）年三月末までの日記である。

本資料の翻刻には関西学院大学大学院文学研究科日本史学専攻博士課程前期課程一年山下真弘さんの多大なるご協力を得た。記して感謝の意を表します。

井上 琢智